

小泉路線にトドメを刺し

「挙国一致・救国内閣」を！

亀井静香

国民新党代表代行
衆議院議員

麻生総理には解散・総選挙の度胸がない！

日本郵政公社（西川善文社長）によるオリックス（宮内義彦会長）への「かんぼの宿」譲渡問題は、平成の官有物払い下げ事件という様相を呈してきた。郵政民営化のみならず、小泉・竹中路線の本質が現れた象徴的な事件といえる。一貫して郵政民営化、小泉・竹中路線に反対の立場を貫いてきた亀井静香氏（衆議院議員・国民新党代表代行）に聞く。



国民新党代表代行・衆議院議員
亀井静香

—— 小泉元総理が、郵政民営化を巡る麻生総理の発言を「怒るといふより、笑っちゃうくらい、ただただ呆れている」と、激しく非難、さらに定額給付金の再可決に異論をとなえた。この小泉発言で、自民党内には「一気に「麻生降ろし」が拡大する勢いだ。

亀井 いよいよ自民党の終わりが始まった。この先にあるのは難破しかない。しかし、いま麻生総理も自民党の議員たちも解散総選挙に打って出るような度胸はない。やれば自殺だよ。

このまま任期一杯の9月まで逃げたら、もつと無惨に負けること間違いなし。結局は、座して死を待つことになるだろう。

しかし、一方の民主党もだらしない。「法案を通してやるから解散しろ」なんて、アホなことを言っているが、解散に追い込むには、自民党に「首をつきつける」しかない。今の民主党の支持率が高いのは、自民党が駄目だから、その反動で利益を受けているだけだ。度胸のない民主党には政権は取れない。果敢に攻めまくらないと自民党政権を落城させられない。

そのためには、問責決議案しかない。問責が成立すれば、以後麻生総理は審議拒否などで参議院に入れなくなる。そうすれば、麻生政権は総辞職か、解散しか、選択肢はなくなる。

断固糾弾！ 平成の官有物払い下げ事件

——「かんぼの宿」売却をめぐるスキャンダルをどのように見ているか。

亀井 「天網恢々疎にして漏らさず」だ。この時期に、スキャンダルが露呈したことは、まさに天佑神助と言つべきだ。

4年前の郵政選挙のとき、国民は自分の大脳新皮質を使つて考える力を失い、小泉劇場に踊らされて、郵政民営化が正しいことだと思ひ込んでしまった。だが、平成の官有物払い下げ事件とも言うべき「かんぼの宿」のオリックスへの不明朗な譲渡が明らかになり、郵政民営化の本質とは何なのか、国民の目に見える形で問題が噴出してきた。かつて郵政民営化を煽つたマスコミ各紙も、さすがにこの問題を取り上げざるを得なくなつてきた。朝日新聞などは、論説では「かんぼの宿」売却を擁護する一方、記事ではオリックスのいがかわしい入札を追及するという厚意狼狽振りがだ。

郵政民営化というのは要するに、明治以来蓄積されてきた350兆円にのぼる国民の資産を、外資に売却するということだ。

小泉・竹中が、ブッシュ・ネオコン路線の言うなりになり、郵政事業を民営化し、M&Aで郵政資産を売却しやすくする仕組みを作り上げた。国民の資産をアメリカの肥やしにしようという売国政策だったのだ。

今、こうした形で問題が明らかになったおかげで、郵政民営化見直しの機運が高まってきて、アメリカでもサブプライムローン問題でネオコン路線が退潮した。まさに神助だ。

——アメリカではオバマ政権が大きな方針転換をしている。

亀井 ネオコン路線は破綻するべくして破綻した。サブプライムローンというのは、貧しい人に甘言を弄して住宅ローンを組ませるといふものだ。それで貧しい人が豊かになれるような政策をとればまだしも、強者がさらに強くなり、貧しいものはさらに貧しくなるといふ新自由主義政策を推し進めた。ローンを返せなくなるのは当然の帰結なのだ。オバマ大統領は「チェンジ」を掲げたが、政策転換せざるを得ないところまでアメリカ経済は追い込まれていたということだ。これは日本でも同じで、規制緩和と称する強者の論理が横行してきた。

消費税増税議論も、つきつめれば強者の論理だ。社会福祉にかかる費用が足りないから消費税を、というのは、別の言い方をすると、金持ちが税金を払つて社会的弱者の面倒を見るのはいやだ、弱者からさらに消費税をとつて、それで連中の面倒を見せろ、という議論なのだ。

自己責任とか、自助努力という言葉で、社会的弱者を一律に突き放すのは間違っている。世の中には頑張つていても天運味方せず、不本意にも苦境に置かれている人もいる。まだ体が動くうちはいいが、体力も衰えたご老人に自己責任や自助努力を求めるといふのは、非情を通り越して冷血と言わねばならない。

日本に生まれて日本で暮らす日本人が、この国に生まれてよかつ

た、と思えるような政治ができなくて何が政治だ。アメリカは既に変わった。日本はアメリカの後追いをして変わるのではなく、むしろアメリカより一歩先んじて変わっていかねければならない。

百年に一度の危機に、「挙国一致・救国内閣」を！

—— そのためには政界再編は不可欠ではないか。

亀井 自民党だ、民主党だ、などと悪口を言い合っているようなチマチマした発想では駄目だ。百年に一度の危機と言われているが、ならばなおさら政権交代程度で乗り切れるとは考えないことだ。今は日本は衰滅するか、世界でリーダーシップを発揮できるかという分かれ目にある。挙国一致・救国内閣が必要なのだ。

次の選挙で自民党は下野し、賊軍となるだろうが、賊軍の中にも優秀な、国のことを考えている人材はいるから、そういう人々も糾合して国難を乗り切る必要がある。

—— 自民党では鳩山総務大臣がすごいん頑張っている。

亀井 私は死刑反対の立場だから、死刑をめぐっては鳩山大臣とは意見が異なる。だが、死刑問題だけが政治ではない。鳩山大臣には今後も活躍してもらいたいし、自民党敗北の後でも、実力を発揮していただきたい。もちろん、法務大臣以外のポストでだが。

—— 解散総選挙となれば、民主党が政権を握る可能性が高い。その一方、寄り合い所帯である民主党での小沢党首のリーダーシップを心配する声もある。

亀井 他人のことを言えた義理ではないが、小沢氏は人相が悪い。性格だつて褒められたものじゃあない。だが、そこがいいのだ。今

こそ小沢氏の出番なのだ。個別の意見の違いを乗り越えて救国内閣を作れるのは、小沢氏のような、清濁併せ吞める強権政治家でなければ駄目だ。

小沢氏は政権を取ったら即座に、これまでの日米関係の機軸を立て直すビジョンを打ち出すべきだ。小泉以来の自民党は、対米服従が協調のことだと勘違いしてきた。そして、国富をアメリカの言うなりに差し出して、筆り取られるがままになつてきた。

だが、先述のようにアメリカは金融危機で金がない。だからまたぞろ日本から金を筆り取りに来るわけだが、オバマ大統領の機先を制して、世界経済建て直しのための政策をぶち上げる必要がある。そんな大きな政策転換をできるのは、小沢氏のような豪腕でなくては駄目なのだ。

—— だがその一方、小沢氏には曖昧に物事をほぐらかす一面もあるし、健康上の不安もさやかれている。リーダーシップを発揮できなければ、政界再編どころか、政界大混乱になるのではないか。その可能性は五分五分ではないか。

亀井 私は評論家ではない。そうはさせないために、死力を振るうつもりだ。どんなに遅くとも、今年の秋には衆議院議員の任期が切れる。今年はずす選挙になる。この選挙を、政策を競う選挙にする必要がある。

小泉・竹中路線と決別して、福祉と内需拡大を目指すのか、対米追従ではなく、世界経済でリーダーシップを発揮するのか、簡単に言えば、どういう国づくりを目指すのかを国民に問う選挙にしなければならぬ。政治にダイナミズムを取り戻さなければならぬ。

マスコミは敵だ！ 朝起きたら新聞など読むな！

—— 衆議院は国民に信を問うことなく4年続き、その間、3回も宰相が交代した。いわば、正統性のない政権だ。その意味で、一昨年に選挙の洗礼を受けた参議院のほうが民意を反映している。歴史になぞらえれば、衆議院は北朝で、参議院が南朝といえる。

亀井 南朝側は攻めるのが下手なんだ。参議院での野党過半数という力を大いに利用していない。麻生総理に問責決議をして、解散しなければ審議拒否をすればいいんだ。ところが、予算案を通したら解散してくれるか、などと弱気なことを言っている。

そんな約束、反故にされるに決まっているのだ。やらざるばかりで終わることになる。民主党がこれほど弱気になっているのは、世論、とくにマスコミの目を気にしすぎるからだ。

—— イソップ寓話に『ロバを担いだ親子』という話がある。ロバを市場に売りに行く親子が、「ロバに乗ればいいのに」「子供をロバに乗せて親を歩かせるとは親不孝だ」「あんなに疲れたロバに乗るとは動物虐待だ」といった外野の声ばかりに右往左往して、ついにはロバを担いで歩く羽目になった愚かな親子の話だ。今の民主党もついにはロバを担ぐ羽目になるのではないか。

亀井 審議拒否をすると「責任感がない」「なんでも反対で、本言に政権担当能力があるのか」などとマスコミに叩かれる。それを恐れて、弱気になってしまっ。

私は、マスコミは敵だ、朝起きたら新聞など読むな、テレビのスイッチを入れるな、と民主党の議員たちに言っている。政治家はま

ず何より、「己の信ずるところ、己の良心に照らして政治を行ふべき」なのだ。

「官僚憎し」の、官僚叩きは無益だ！

—— 郵政とならぬ問題は、公務員改革の問題だ。

亀井 内閣官房に官僚の人事権を移管する、ということをやっているが、これはナンセンスだ。人事権というのは大臣が持たなくては駄目だ。人事権のない大臣の言うことなど、官僚が言うことを聞くわけがない。

—— 民主党は政権を取ったら官僚に辞表を書かせると言っている。

亀井 そんなのは当然のことだ。私が運輸大臣を務めたとき、最初の訓示は、辞表を持つて来い、というものだった。さすがに辞表は勘弁してくれ、と言ってきたから、それじゃあ、よからぬ事をしたらクビにするからな、と約束をさせた。大臣の人事権というのは官僚を働かせる力の源泉なのだ。

それから、副大臣や政務官として、議員をたくさん省庁に放り込むということをやっているようだが、それも無駄なことだ。右も左もわからない政治家が専門家集団の官僚の中に放り込まれてもまごつくだけで、かえって官僚が議員のお守りで忙しくなり、業務に支障が出るだろう。

小泉元首相は、方向性は別にすれば、確かに実行力のある首相だった。彼の「内閣一大臣」という方針は正しい。適材適所の人事を行って、あとほじくりと大臣に仕事をさせる、というのが官僚にとってもいいのだ。

—— 天降り、渡りについてはどこう思つか。

亀井 官僚というものは、やはり優秀な人材がそろっている。彼らは使い捨ての道真ではなく、それぞれの家庭があり、人生があることを忘れてはならない。天降りや渡りがけしからんというのなら、官僚を取り巻く現実を変えなければならぬ。

霞ヶ関では、定年まで同じ倉庁に勤め上げるといふ人はごく稀だ。事務次官になれるかなれないか、見極めがつく50代ころで大抵は退職することになる。

そういう人々を、民間企業の人並みの給料を得られるように特殊法人で受け入れて、これまでの薄給で働いてきた分を取り戻させてやるというのが天降りだ。特殊法人の仕事というのは、本来は各官庁の内部で処理すべき仕事を発注しているものだ。

これをやめさせるといふのなら、定年まで局の中で仕事をさせつつ、さらに民間から見てもリーズナブルな給料体系というものを構築しなければならぬ。「官僚憎し」といふような官僚叩きは現実的ではないのだ。

—— 官僚に無駄な仕事が多いのも事象だ。

亀井 その最たるものは、「想定問答集」作りだ。国会開会中は、どの役所も夜中まで煌々と明かりがついている。徹夜で仕事をしているのだが、その8〜9割は、翌日の想定問答集作りなのだ。質問を作るのも、その答えを作るのも同じ役人だ。同じ人間が作った質問を読み上げて、同じ人間が書いた答を国会で読み上げている。

馬鹿馬鹿しい限りだが、困ったことに、役人もその馬鹿馬鹿しい作業をして、仕事をしたという充実感を覚えてしまっている。こう

した作業がなくなれば、官僚の数は今の半分で十分倉庁はまわるのだ。公務員改革を訴えるのなら、与党も野党も、まずは想定問答集作りなど官僚に頼まないことだ。

至誠は必も国民の心に伝わる！

—— 百年に一度の危機 平成の官有物払い下げ事件、と未曾有の国難であるにもかかわらず、国民の怒りは高まるどころか、なにかにしらけているように思っ。

亀井 国民に生体反応がなくなっている。小泉・竹中改革で肉を削がれ骨を砕かれ心臓にまでメスを入れられても、悲鳴一つ上げない。だが、国民とはそういうものだ。

幕末を思い返してみれば、黒船が来たときも、国民は死に体だったのだ。欧米が怒涛の勢いでアジア諸国を蹂躪する中、危機意識を持って天下国家のために命を賭けて走り回った志士たちは、人口比で言えば、ほんの少数だった。しかし、人数は少なくても、至誠は必ず人の心に伝わり、国民の意識も甦る。

官有物払い下げ事件のときもそうだ。この問題を追及し、各地で演説して回ったのは自由民権運動の志士たちだった。彼らの獅子奮迅の働きが、国民を覚醒させて、明治14年の政変につながったのだ。

—— 亀井先生が、幕末、そして自由民権運動の志士たちの役目を果たすということか。

亀井 私だけではなく、国民新党のみんながそういう心意気で歯を食いしばって頑張ってきた。最初は5人でスタートした国民新党も10人に増えた。潮目は変わりつつある。私は樂觀している。